

冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議 議事録

日 時	令和5年11月1日（水）13時15分～14時30分
場 所	ORE 札幌ビル7階会議室B
議 題	(1) 今後の招致活動について（大会運営見直し案を含む） (2) 北海道スポーツ医・科学コンソーシアムについて
出席者	別添「資料2 出席者名簿」のとおり
配布資料	別添のとおり

発言者	発言要旨
1 開 会	
梅田局長	本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。冒頭の進行を務めさせていただきます、札幌市スポーツ局長の梅田でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。 定刻となりましたので、ただ今より、「冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議」を開会いたします。 はじめに、配布資料の確認をさせていただきます。資料は、 ・議事次第 ・資料1 座席表 ・資料2 出席者名簿 ・資料3 今後の招致活動について ・資料4 ウィンタースポーツシティの実現に向けた取組について ・資料5 北海道スポーツ医・科学コンソーシアムについて となっております。 不足がある場合はお申し付けください。大丈夫ですね。 本日の出席者の紹介につきましては、お配りした座席表および出席者名簿をもって代えさせていただきます。 それでは、次第に沿って進行させていただきます。 はじめに勝木会長からご挨拶をお願い申し上げます。
2 勝木会長あいさつ	
勝木会長	勝木でございます。今日は大変お忙しい中、関係の多くの方にご出席を賜りましてありがとうございます。また、報道機関の方も本当にありがとうございます。

	ご承知のように、北海道・札幌オリ・パラ冬季競技大会の招致が、2030年・2034年ともに大変厳しい状況になってしまいました。 招致の話が初めて出たのは今から15～6年前であり、9年前に市長が正式に表明され、招致期成会ができ、札幌市が中心となり、各団体が協力し合って招致活動を進めてまいりました。関係団体には大変お世話になりました。競技団体にも大変ご尽力をいただき、昼夜を問わずいろんな活動をしていただきました。改めて御礼を申し上げたいというように思います。 そういう中で、私もいろんな取材を受けているわけですが、「決してスポーツの素晴らしさを否定しないでくれ」というお願いを常にしております。スポーツの素晴らしさ、子どもたちが目を輝かせ、将来に目標を持ってやっているそのスポーツ、それを見ることによって多くの国民や市民が感激をする姿、そういうものに対して否定をしないでくれ、ということです。 我々競技団体としては、今後もスポーツの普及に全力を尽くしていく、選手強化に対しても本当に全力を尽くしていく、というお話をさせていただいております。 そういう意味でこの競技団体連絡会も、オリンピックの問題がいろいろとありますが、今後、ウインタースポーツの普及という意味では、大事な会議体であるというように思っておりますので、ぜひとも今後ともご協力をいただきたいというように思います。 今日は大きく2つのテーマがありまして、議事としては、今までの招致活動について札幌市の方からご説明をいただくということ、それから、選手強化やスポーツ振興には医科学というものが大きなウエートを持ち始めており、片寄教授にその辺のお話をいただきたいなというように思っております。 また、競技団体の代表の方からは、今後のスポーツ振興、競技の普及についてのご意見、それから、オリンピックは別にしても、我々の競技施設が抱える問題についても教えていただければ、今後のスポーツ振興に大きな参考になるというように思います。 限られた時間になりますがよろしく願いいたします。以上です。
梅田局長	勝木会長、ありがとうございました。続きまして、石川副市長からご挨拶をさせていただきます。
3 石川副市長あいさつ	
石川副市長	札幌市で副市長をさせていただいております石川でございます。 本日は大変お忙しい中、皆様、このようにお集まりいただきまして誠にありがとうございました。また、競技団体連絡会議の皆様には日頃より札幌市のスポーツ行政に多大なるご尽力を賜っておりますことを、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

	昨年の連絡会議では、オールジャパン体制で札幌2030大会招致の機運醸成を図るため、皆様にご議論をいただき、そして、アスリートの育成等さまざまな観点から貴重なご意見をいただいたところでした。会議後も、招致ポスターの掲出をはじめ、さまざまな場面で皆様のご協力を賜りましたことを、この場をお借りして厚く感謝申し上げます。 しかしながら、その後生じました東京2020大会をめぐる事案等について、市民の不安や懸念を完全に払拭することができず、過日、2030年の招致を断念することと相成ったところであります。 今後は2034年以降の冬季大会開催の可能性を探ることとし、当面、IOCとの継続的な対話を引き続き行っていくということになりますけれども、本日は、そのような状況を含めまして、今後の招致活動につきましてのご説明をさせていただきますとともに、連絡会議の皆様におかれましては、特にアスリートの育成等の組織としての取組や今後の展望等について情報共有を図らせていただければと思っております。 今後とも、北海道・札幌におけるウインタースポーツの振興につなげていただければ嬉しい限りでございます。 限られた時間ではございますけれども、皆様の熱い、闊達なご議論をご期待申し上げまして、開催にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。 本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。
梅田局長	ありがとうございました。ここからの進行は、勝木会長にお願いをいたします。
4 議 事 (1) 今後の招致活動について	
勝木会長	それでは、早速、議事に入ってまいります。 議事次第のとおり、(1) 今後の招致活動について、梅田局長のほうからご説明をいただければというように思います。
梅田局長	資料3・4に基づき説明
勝木会長	ありがとうございます。 各委員からのご意見・ご質問は、この後、各委員の方にお話をいただくとして、まずは進行していきたいというように思います。
4 議 事 (2) 北海道スポーツ医・科学コンソーシアムについて	
勝木会長	(2) 北海道スポーツ医・科学コンソーシアムについて、片寄教授の方からお願いいたします。
片寄氏	資料5に基づき説明

勝木会長	札幌1972大会の時に、日の丸が3つ上がった。長野1998大会の時に、冬季スポーツで10個のメダルが取れた。そして、北京2020大会では、18個のメダルが取れた。 着実に数字が伸びてきており、そういう中で、例えばナショナルトレーニングセンターの医科学によって、成績が上がってきたという見方があります。全日本クラスの選手を育成していくためには、各地域できちっと、この医科学の部分のサポートをするべきだということで、片寄教授が中心となって、こういうものを北海道からやっていこうということでもあります。 ぜひともその辺のご理解をいただければというように思います。
5 意見交換	
勝木会長	ただ今お話がありましたアスリートの育成、それから今回、パラのアルペンのワールドカップが行われますが、今後の国際大会の誘致等について、組織としてのご意見等がありましたらご発言をいただきたいというように思います。時間はひとり2分程度でお願いいたします。
外崎委員	札幌アイスホッケー連盟の外崎でございます。 札幌の連盟としての取組みについては、基本的にアイスホッケーの普及・振興と、加盟団体の育成・強化を図るために必要な事業を行い、札幌市民の心身の健全な発達と北海道のスポーツ振興に寄与することを目的に取り組んでおります。現在、競技者の人数は1,270名余り、チーム数は68チームであります。 連盟としての強化・育成については、小学校、中学校、女子については中高のカテゴリーで強化・練習を実施しております。 また、普及・振興については、札幌市スポーツ局のオリンピックズキャラバン事業を活用させていただき、今年はオリンピック等のトップアスリートを招聘し、小学校を対象にスキルキャンプを実施しております。 観戦については、昨シーズンからアジアリーグ所属のレッドイーグルス北海道のゲームを月寒体育館で開催しております。ハイレベルのゲームを観戦することにより、競技の魅力を発信し、ファンの獲得に取り組んでおります。 また、全国規模でのアスリートの育成については、女子はU-16、U-18のキャンプの実施、男子は、U-14、U-16、U-18、U-20のキャンプを実施しております。 また、女子日本アイスホッケーリーグ、これはスマイルリーグと称されますが、昨年は中学校選抜チーム、今年はU-18全国選抜チームの2チームをリーグに加入させ、ジュニア・ユース世代の更なる強化・育成を図っております。 札幌だけ考えますと、前回の北京オリンピック女子アイスホッケーチー

	ムには、札幌出身の選手が3名選出されております。また、今月の3日にはありますが、フィンランドで開催される大会に出場する女子U-18には札幌から2名が選出されております。 基本的に展望に変更はありませんが、特に現在の女子代表チームはランキングが6～7位と、オリンピック出場権を争っている状況にあります。 札幌では、中学生・高校生のチームがない現状にありますので、小学校を卒業してから、次に中学校と入るんですが、次に一般社会人のチームになってしまいます。 強化については先ほど言いましたように、中学生・高校生のカテゴリで強化・育成を図っているところです。レベルアップをしながら、オリンピック出場に繋がたいと思っております。 国際大会の誘致については、現在のところ予定はありません。これは、現在の施設では、国際大会や国内の大きな大会を開催するには、選手控室等が不足しており、招致が難しい状況にあるためです。ぜひ、新月寒体育館が建てられることが決まりましたら、国際大会を招致できる施設として、上部団体へ働きかけたいと思っております。 また、今年の8月には、札幌市スポーツ局からの体験企画として、ウインタースポーツ塾のお手伝いをさせていただき、午前・午後で120名ほどの体験者が集まりました。今後も良い企画を継続していただければというふうに思っております。以上でございます。
伊藤委員	北海道と札幌のリュージュ連盟の会長をしております伊藤と申します。よろしくお願いいたします。 リュージュ競技につきましては、藤野にありますFu'sスノーエリアに北海道・日本唯一のコースがあるということで、札幌1972大会以来、そこを活用して選手の育成・強化を行ってまいりました。 一般の方にはなじみの薄い競技ということで、4年に1度のオリンピックの機会を利用して普及していくということが大きなポイントになっておりまして、それ以降、継続して選手の発掘を行っております。 日本全体でも選手の数がだんだん少なくなってきており、また、競技団体としても指導者の減少・高齢化といった悩みがありますが、札幌市のお力をお借りしながら、現在も藤野で主に体験教室をメインに小さなお子様から大人まで楽しんでいただき、普及という意味で、競技役員一同、力を入れているところでございます。 ただ、2年ほど前から、我々の上部団体である日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟が選手強化の方針を大きく転換し、リュージュ競技においては若年層、特に小さいころからずっと競技をやっていた選手が成人になってから世界的に強くなるということは世界的な傾向であることははっきりしておりまして、長いスパンをかけて選手育成をしなければならない

	ということで、2年ほど前から全国各地の小学生を中心として選手発掘事業を行っておりまして、我々もそれに協力しているところです。 現在、3年目に入っておりますが、札幌市の中学生と小学生1名ずつ（男子・女子1名ずつ）が選抜され、強化対象となって、昨シーズンは海外遠征に行ったところです。 成果が出るのはまだ先かとは思いますが、そういうものを支えていくのが我々の使命だと思っておりますので、これからも、選手の発掘・普及ということでやっていこうと思っております。 Fu'sスノーエリアも継続的なご支援をいただき、これからも頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。
野長瀬代行	札幌カーリング協会 副会長の野長瀬と申します。よろしくお願いいたします。本日、会長の小野が大学の講義で時間が作れず大変申し訳ありません。 今後の招致活動について、まずは2030年招致に期待していたところであり、大変残念に思っております。そして今日、お話の中で2034年招致も難しい状況であると同いしましたので、今後の招致活動に我々協会がどのように携わっていくかということが課題となっていくと思います。我々協会としては、こういった連絡会議の意向を踏まえ、活動に協力していきたいと考えているところです。 カーリングについては、ご承知のとおりオリンピックでのロコ・ソラーレの活躍等があり、非常に人気が高まっているところです。市民からもぜひ体験したいという声が多く寄せられております。 我々としても、指導員を筆頭に、市民に対する支援を図っているところです。ただ、裾野を広げて行こうにも、そのための施設がないという残念なことがあります。札幌市の推進計画を読みましたら、冬季スポーツがなかなか市民に受け入れられないということがありますが、裾野を広げるためには、基礎的な部分にあたる施設がないと、なかなか難しいということをご認識いただきたいと思います。 カーリングは子どもから高齢者まで、幅広く参加できる生涯スポーツと言われております。現状では施設は1つ（どうぎんカーリングスタジアム）しかありませんが、これを2つ、3つと増やしていただき、200万都市札幌に、カーリングと観光を通してまちづくりができる環境を整えていただきたいと思います。 アスリートの育成については、北海道や札幌市の事業を活用して、指導員のもとに、競技力の向上を図っているところです。多くのジュニア大会へ参加し、優秀な成績を収めております。このように、子どもたちに向けて指導を図っていききたいというのが私たち協会の考えです。 コンソーシアムについては、スポーツと医学を結びつけ、ぜひ、オールジ

	ジャパンの体制に向けて頑張っていたきたいと思います。できることについては協力させていただきます。
荻野委員	北海道バイアスロン連盟の荻野と申します。 我々の活動としましては、将来を見据え、普及・発掘・育成・強化という基本的な枠組みのもと、これらの事業をそれぞれ別個にならないように、立体的に組み合わせて運用していくということに力を注いでおります。 競技者の拡大、支える側であるコーチ等の裾野拡大ということも目的に、特に普及については急務と考えており、現在、札幌市はもとより、北海道各地、旭川、倶知安、東神楽町等で、おおむね月に2回程度のペースでいろいろな普及活動等を行っているところです。 もともと、競技の特性から銃刀法の問題があり、なかなか身近に体験してもらえる機会がありませんでしたが、近年ではレーザーライフルにより、人体に害のない環境で身近に競技を体験してもらえるということで、普及を図っているところです。 また、国際交流ということで、今年度については韓国とのスポーツ・文化交流事業を計画しているところです。 今後もスポーツの価値・楽しさ・魅力をしっかりと市民に浸透させていくことがスポーツ競技団体にとっての責務と考えており、具体的な手段としては、ライフステージに応じたスポーツの機会の提供ということを考えております。子どもであればスポーツの楽しさや遊びを通しての浸透、若年期であれば競技力の向上やトップ選手の育成、壮年期であればフィットネス、高齢の方であれば健康福利等、ライフステージに応じたスポーツの価値や、フィットする要素があると思っております。そういったものを、バイアスロンを通じてうまく手段として浸透させていければと思っております。
出口委員	札幌バイアスロン連盟の出口でございます。 最初に、冬季オリンピックの招致にご尽力いただきました秋元市長をはじめ、勝木会長、本当にご苦勞様でした。先ほどの説明でも、本当に努力されたことを理解することができました。 次に向かうにあたり、今までやってきたことは決して無駄にならないと理解しています。競技団体に置き換えて言えば、2030年に向けてNTCができたり、競技のメッカであるスタジアムができたり、初めて自分たちの強化拠点ができたりということで楽しみにしておりましたが、先延ばしの楽しみということで、今までの取組を紹介させてもらいたいと思います。 私は札幌バイアスロン連盟だけでなく日本バイアスロン連盟の会長もしておりまして、北海道バイアスロン連盟の荻野会長とも連携を取りながら進めているところです。 課題の一つとして、バイアスロンが国体種目になっていないということ

	があり、2030年を目標に国体種目にすべく努力を続けているところです。47のうち24都道府県に競技連盟を作れば公開競技をやっていただけるということであり、そこに向かって努力しているところです。我々が連盟を引き受けた際には20の都道府県に競技連盟がある状況であり、24に近づきつつあるので、何とか公開競技につなげたいと考えております。 コーチについては、日本スポーツ協会の事業のひとつである公認コーチ制度を利用し、3年前から公認コーチの育成を図っているところです。 アスリート発掘については、いかに将来の選手を発掘するかということで、日本スポーツ振興センターのアスリートパスウェイ事業を委託してもらい、中学生・高校生・大学生・一般と、何とかつなげることができたところです。普及の支障となっていた「ライフルの所持可能年齢は20歳以上」という課題についても、先ほど荻野会長から説明があったとおり、人に危害を与えず、所持許可も不要なレーザーライフルを利用して全国に普及させ、国際大会招致につなげられるように進めているところです。 コンソーシアムについては、片寄先生にご理解をいただき、北海道の中でバイアスロンをモデルケースとしてご指導を受けながら進めているところです。
浅香委員	障がい者スポーツ協会の浅香と申します。どうぞよろしくお願いいたします。 私も2030大会の招致を断念せざるを得なかったということが本当に残念でなりません。札幌市の大会概要にも書かれておりましたけども、やはりユニバーサル社会の推進、共生社会の実現、これを大きく謳った大会であると認識しておりまして、障がい者・高齢者含めて一般的な弱者と言われる方々の社会進出にあたり、大きなチャンスが到来したなというふうに思っておりましたので、残念でならないと思っていますところです。可能であれば、2034年大会を別なものに置き換える等により、目的や言い方を変えながら、何かできないものかなというふうに考えているところです。 障がい者スポーツには拠点施設がほぼなく、競技環境としては脆弱なものとなっております。指導体制、特に高度な指導力を持っている者が札幌市内にはほとんどいないため、トップアスリートを目指す方については、高校生ぐらいになったらみんな本州の方に行ってしまうので、現実的に札幌市に在住する方は、先般のアジア大会では1人しかいないという状況でした。 そういったこともあり、現在、札幌市スポーツ局で拠点施設のあり方や必要性について検討を進めてくれており、これが実現し、障がい者スポーツが大きく前進することに期待を込めているところです。 また、先般アジア大会に行った選手も障がいを持っており、薬を常用しておりますので、先ほど片寄先生に医科学サポートについてお話をいただきましたけれども、今後もお力添えをいただければ幸いに考えております。そ

	の方は、かかりつけの薬剤師に（ドーピングで陽性反応が出ないか）大丈夫かと聞いているということであり、万が一、反応が出てしまうと大変なことになるという話をつい1ヶ月前にしたばかりだったので、ぜひお力添えをいただければと思います。 物理的なバリアフリーというのはどんどんお金をつぎ込めばできるとは思いますが、経費の問題があります。心のバリアフリーを構築するのは決してお金には代えられないものだと思っておりますので、次の大会に向けて積極的に打ち出していただければというふうに思っております。以上です。
新保副会長	北海道スケート連盟と札幌スケート連盟の会長をやってる新保でございます。よろしくお願いします。 強化関係でいうと、札幌市が2014年の上田市長の頃にオリンピックの話が立ち上がったところから始まるんですけども、災害があったり、東京の問題があったり、いろんな流れがあり、札幌市の役人の方たちもご苦労されていると思うんですけども、新聞を見ていると、札幌は断念するということが今日も記事に出たなと思うことがありました。北海道スケート連盟の役員は別としても、札幌スケート連盟の中で、オリンピックに対してどんなことを希望するのか話し合いの場を設けたことはこれまでになかったのですが、つい先週の会議の中で、二十数名程度の札幌スケート連盟の役員、特にスピード関係の役員に対して初めてオリンピックの話をしました。その中での希望は、たとえ招致を白紙にするとしても、やはり改めて札幌で立候補していただきたいということでした。役員が本当に今まで胸につかえてたものを吐き出したように、ぜひ何年かかってもいいから立候補してもらいたい、そういう希望が非常に多かったところでございます。 各連盟の強化の関係等、いろいろ話を聞きました。私も札幌オリンピックの時は33歳ほどでしたが、その時に、練習場やリンクの管理を担当しており、各国の練習日程や氷の管理を約1か月やっておりました。私も仕事がありましたが、寝ないで毎日リンクを管理し、たくさんの思い出を作らせていただき、立候補していただいた当時の市長や知事には本当に感謝を申し上げるところでございます。強化の方は、北海道連盟の方で、札幌、苫小牧、帯広、釧路、旭川、それに下部組織がたくさんあり、その中で国際的な選手もたくさん育ってきております。 余談ですが、真駒内のスピードスケート競技場は札幌1972大会の1年前に完成したのですが、できたてははやはやのリンクに乗ったのは私が第1号だと思っていたら、そこの現場で工事をしていた所長さんがその前に乗っていたということで、ナンバー2だったということがありました。国際スターターという資格を持っており、長野オリンピックの際には運良くスターターも経験させていただきました。 札幌市の関係の方には大変な苦勞をいただいたことを良く知っておりま

	す。十数年先の招致でもいいので、ぜひこのまま立候補を続けていただきたい。新聞でも雑誌でも、落選という言葉が必ず活字になります。それでも構いません。また次を目指すという動きをしていただければ、子どもたちは必ず希望を持ちます。 また余談ですが、スピードスケート女子の高木美帆がたまたま小学校5～6年の時に縁がありました。その年齢の子どもたちは子どもの大会にしか出ることができなかったのですが、あるとき苫小牧の北海道選手権にどうしても小学校6年生を出してほしいという話があり、それが当時の高木美帆でした。ルール上、小学生は危険なので出すことができなかったのですが、周りのコーチたちの希望を聞いて、3種目だけ出場を許可しました。500m競技でスタートのところに立って見てみると、6年生ながら一般選手と見間違ふほどの雰囲気を持った子で、いい意味でちょっと異質だなと思いました。札幌のスピードスケートリンクがあった頃は、子ども向けの大会をたくさん開催しました。今はリンクがないので苫小牧の方でやっております。 色々な関係を築きましたが、札幌市の方には、改めて立候補をしていただきたい。将来の子どもたち、我々の後輩たちのためにも、夢を持たせてやりたいという願いを持っております。 長々と失礼しました。ありがとうございます。
高見局長	いつも競技の普及啓発にご協力いただきましてありがとうございます。オリンピックの方は大変厳しい状況ということで、先週、市長の方から知事にご報告いただいたところでございますし、本日、各競技団体の方から寄せられた声につきましては、戻ってから報告したいと思っております。 それから、片寄先生の方からスポーツ医・科学コンソーシアムのお話がありましたけれども、オリンピックに関わらず、競技力の向上とか、スポーツの価値向上というのを実現していくためには、この医科学の取組みは大事だというふうに思っており、道としましても、最大限協力していきたいというふうに思っておりますので、皆様方におかれましても御協力のほど、よろしくお願いいたします。
高野専務理事	オリンピックの価値は、私がここで申し上げるまでもなく、これまでも議論されてきましたので、今回のオリンピックの招致の関係、また新たな方向性が具体化しましたら、北海道スポーツ協会としては、北海道内のスポーツ競技団体を統括する立場として、しっかりと歩調を合わせ、取組みを共に進めてまいりたいというふうに思っております。 また、様々な競技団体の方からお話がありましたが、それぞれの競技の普及や競技力の向上を図っていく上で、老朽化対応や新たな施設の整備というのは、論を待つまでもなく重要なわけですから、必要なものにつきまして

	は、オリンピックの議論とも切り離して、裾野を広げていく上でも着実に進めていただきたいということで、関係の皆様ぜひこの場をお借りしてお願いをしたいというふうに思っております。以上です。
石川理事長	札幌市スポーツ協会の石川でございます。 私どもは、札幌市からいろいろな事業を受託したり、補助事業を行ったりということをしております。その一環で、先ほど資料4で梅田局長の方からアスリートの発掘・育成という紹介がありましたが、それを実践する組織として取組みを進めています。 今は、冬季5種目、夏季3種目で育成事業を実施しておりますけれども、各競技団体からセクションをいただいた選手が93名おり、合宿、合同研修会、フィジカルトレーニング等を行っております。 また、発掘事業につきましては、小学校3～6年生を対象に、毎年、スポーツ能力測定会を実施し、その中から優秀・有望な子どもたちをセクションしていくという事業を行っております。 これは令和3年度、つまり2021年度から始めた事業であり、その時の申込者が1,760名おりました。これはオリンピック効果だったと言えるかもしれません。翌年が600名ぐらいでしたので、身近でオリンピックが開催される、トップレベルの選手のパフォーマンスが見られる、ということはやはり子どもたちにとってはかなり影響が大きいのだと感じました。 現在、スポーツ能力測定会からは年間12～15人くらいセクションするんですけど、今は、27人の登録があり、毎月4～6回ぐらい合同で、様々な身体能力を鍛えるトレーニングを実施しておりますが、将来的には育成事業の方に移り、トップアスリートを目指してほしいなというふうに考えております。 現在は8種目ですから、もっと種目を広げて各競技団体の皆様と連携してやっていきたいと思っておりますし、今年はコンソーシアムが立ち上がりましたので、そういう科学的な視点から子どもたちをどのように育成すべきかということも、皆様と連携しながら、ぜひ取組んでいきたいというふうに考えています。以上です。
勝木会長	最後にスキー連盟としてお話をさせていただきます。 まず、全日本スキー連盟として普及活動、それから技術力の向上、そして選手強化という三本柱を中長期計画として10年の計画を作成しました。その中で、2026年、2030年、2034年のオリンピックの入賞数、それからメダルの数も具体的な目標として数字を入れております。 それに対して、各加盟団体、北海道スキー連盟、長野スキー連盟等の加盟団体に選手強化の支援のお願いをしております。その成果を1年ごとに検証していこうというのが今のスキー連盟の状態であります。

	北海道でも札幌スキー連盟が中心となって、このお正月にもワールドカップを3つ行います。それから全日本選手権等も含めて、国際大会をかなり実施する計画をしております。これも各地域で選手強化をして、ゆくゆくはオリンピックでの選手の活躍というものを目指していこうということで、一丸となってやっているというのがスキー連盟であります。 それから私は招致期成会としてもう一つの立場をずっとやってまいりました。札幌1972大会が、ご存知のように、地下鉄を含めて大通等のハードのまちづくりの完成形に大きく貢献をしたという中で、十数年前から、「札幌オリンピック」という名前を「北海道・札幌オリンピック」というものに変えました。その後、「北海道・札幌オリ・パラ」というように変えました。 概念が広がって、それから種目が広がってきたということで、とにかく北海道全体でものを考えよう、それから、健常者だけではなく、パラの人たちが入っていただくことにより、人に優しいまちづくりの一環になってくる、そんなソフト面のまちづくりのために招致が必要だということをこの十数年ずっと訴えてまいりました。 そういう中で、招致が難しくなったとしても、スポーツの素晴らしさ、それから選手強化の必要性、これは変わらないだろうというように思っていますし、スノーリゾート北海道という観光の概念、冬の観光という意味でのスノーリゾートの概念、それから、札幌市が積極的にやろうとしているスノースポーツという形を考えると、ここにいらっしゃる関係者が今まで以上に連携をしながら、人に優しいまちづくりの一環として、北海道・札幌の中心となってウインタースポーツの普及をすることが、大事なことだろうというように思っておりますので、ぜひともご協力をいただきたい、いうように思います。 この会のネーミングであります。招致の運動は今後進めていくというように思いますが、どちらかというとなスノースポーツの普及を目指すという形に多少変わるかもわかりません。 それでも、その趣旨・目的をご理解いただきながら、ぜひともご参加いただいて、ご協力をいただければというように思います。 本日の私のお役目はこれで終わりますが、事務局の方にマイクをお返しして、質問等も事務局の方で受けていただければと思います。
梅田局長	皆様、ありがとうございました。 各競技団体からのご意見の中でいくつか札幌市の施設整備に関するお話も出てきてましたので、その辺りのご説明をさせていただきたいと思います。 資料4で先ほどご説明した中にも、いろんな取組みをしていくベースとして、やはりウインタースポーツ環境の整備というのは、特にこのウインタースポーツというのは特殊な環境の中で競技が行われるということで、特

	にアイスリンクについてはですね、やはりある程度公共で用意していかないとなかなか裾野が拡大していかないという部分がございます。既に皆さんとご相談させていただきながら、現在、札幌1972大会に合わせてできた月寒体育館、それから美香保体育館の老朽化が進んでおりまして、もう既に50年が経過しているということでございまして、将来的にアイスリンクをどういうふうに再整備をしていくかということでアイスリンク基本構想というのを、先月、案として作成をさせていただいて、現在パブリックコメントをかけているところでございます。 その中で美香保体育館につきましては、現在冬だけの使用ということになっておりますけれども、これを通年化していくということと、カーリングにつきましては、先ほど札幌カーリング協会の野長瀬代行からありましたように、今のどうぎんカーリングスタジアムは飽和状態ということで、やはりもう一つカーリング場が必要だろうということで、今はその第2カーリング場というものを現在の美香保体育館とは別の場所、つど一むの周辺を今想定してますけれども、そちらに整備していくという構想を掲げております。 また、月寒体育館につきましては、札幌ドーム周辺の方に新月寒体育館を整備していこうと、そういったものを今策定しようとしているところでございます。 それから、障がい者スポーツの関係は、現在、障がい者スポーツセンター拠点施設を札幌に作るべきではないかということで、現在いろんな調査を行っております。来年にも基本構想のようなものを策定しようと考えておりまして、箱を作ると同時に、どうやって障がい者スポーツにおいてアスリートを育成していく仕組み・ネットワークを作っていくかというソフト面も含めて、そういう意味では医科学連携みたいなものも少し関係してくるんですけども、そういったようなところについて、現在調査を行っているところでございます。いずれにしても、札幌がウインタースポーツ都市として、将来的に発展をさせていくためのベースとなる、そういった環境整備というものについては、アプローチとしてもしっかり引き継いでいきたいというふうに思っておりますので、またいろんな具体的なヒアリング等をさせていただくことがあろうかと思っておりますけれども、よろしくお願い申し上げます。私からは以上でございます。
6 閉 会	
梅田局長	本日は活発なご議論をいただき誠にありがとうございました。 今後も、IOCの動向等を注視しながら、冬季競技の発展に向けて引き続き取組んでまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。 以上を持ちまして、会議を終了いたします。ありがとうございました。